中居藏書

中居吉之助氏寄贈

明治三十四年十一月

崇廣

第拾五號

滋賀縣立第一中學校崇廣會

◎崇廣第拾五號目次

◉論說

○再び學生諸子に告ぐ　特別會員　坂田文次
○名山大川に對する誤想につきて　特別會員　新井無二郎
○吾人の希望　第五年級　岩田榮太郎
○神州男兒の本領　第五年級　三木會次郎
○史上の英雄　第三年級　勅使河原佐太郎
○青年の本領　第三年級　飯村祐念

◉文苑

○鷄鳴書院記　特別會員　服部愛軒
○書碧梧翠竹集後　特別會員　服部愛軒
○登牛尾山記　第五年級　林富之助
○題征清圖卷　第五年級　岩田榮太郎
○養老にいたる記　第五年級　村上善正
○竹生嶋紀行　第五年級　松居源四郎
○伊吹あらしの一節　第四年級　澤村專太郎
○旅の一日　第四年級　松井太四郎
○春の日の遊びを記す　第四年級　那須開神
○昨夜の夢　第四年級　河村喜一郎
○月夜の感慨　第四年級　河村喜一郎
○草枕　第四年級　野村義雄
○城山の雪戰　第三年級　清水省三
○筆のすさび　第三年級　白井敬次郎
○春の夜のそゝろあるき　第三年級　白井敬次郎
○春の野邊　第三年級　山木繁七
○秋の一夜　第三年級　勅使河原太郎
○吾が舊師　第三年級　川瀨政七
○琵琶湖の月　第二年級　東野修
○城山に登る記　第一年級　野間莊三郎
○英文　第五年級　廣瀨助一郎
○送菊池仙湖之南京同文書院外五首　特別會員　市瀨雨山
○金龜城晩望外一首　特別會員　杉浦鴨渚
○秋夜懷感　第五年級　林富之助
○海小舟　特別會員　岡田杏次郎
○虹の歌　第四年級　野村義雄
○星　第四年級　河村喜一郎
○今の世　第三年級　清水省三
○蜂腰數首　特別會員　岡田杏次郎
○和歌四首　第五年級　宇野順
○疎香　第五年級　松居源四郎
○和歌三首　第四年級　田中藤六郎
○和歌四首　第四年級　那須開神
○うた三首　第三年級　清水省三

◉雜錄

○江州第一中學校　第五年級　新聞評
○遊學せる友の怠惰を戒むる文　第四年級　山本小五郎
○崇廣漫錄　第四年級　賀來俊一
○寸鐵錄　第四年級　廣瀨文豪
○熱誠と忍耐　第四年級　近藤兵一
○農　第三年級　清水省三
○警鐘　第三年級　二三理事

◉雜報

○本校日誌摘要其他三十七件

◉會告

○崇廣會規則其他五件

崇廣第拾五號

論說

◎再び學生諸子に告ぐ

坂田文次

諸子は何の爲ゑ學問をなしつゝあるか、殊に中等教育をうくる諸子は、如何なることを得んが爲に、十幾科の普通學を學びつゝあるか、これ予が諸子に聞かんと欲する所のものなり、然るに諸子はたゞ或は高等專門學術の準備として、或は普通實用に缺く可らざる諸學を修むるものなりと即答すべし、然らば更に英語は何の爲に學びつゝあるか、數學は何の爲か、歷史は如何、地理は如何、曰く何、曰く何、と一々課目を擧げてその答を求めんか、諸子は聲に應じて之に答ふることゝ容易なるべし、曰く英語か、今や二十世紀の文明漸く世界に波及して、我國も亦この大舞臺ゑのぼれり、政治に實業ゑ文藝ゑ其他百般の事物に、此世界的通語を知らざれば、世に立ちて活動をなす能はずと、答ふるなるべし、然れども此目的を達するが爲に、能く英語を解し、能く英語を話し、能く英文を書く事の外には、諸子は何の爲に英語を學ぶやと問はゞ、恐らくは諸子は予の問の奇なるを怪むなるべし、然れども、こは予の最も聞かんと欲する所のもの也、更に數學は如何に、諸子はいはむ、數學は數理の全般を研究し、數及び量ゑ對するすべての應用に通ずるものなりと、更ゑ其以外に何の得る所ありて之を學ぶかと問はゞ、恐らくは諸子はまた予の問の奇なるを怪むなるべし然れども、こは予の最も聞かんと欲する所のものなり

其他の十幾課目につきても、諸子は只其理論と其實地の應用とを研むるものなりと答へて、其以外に一の大なるものを得んとせざるべからざることを識らざればこれ予が諸子の一省せんことを切に望む所なりとす、實用以外に於ける外國語の價につきて、聊か予の所見を述べんに、すべて外國語を學ぶものは、其一國を發見するもの也、英語ならは英國を發見するもの也、獨逸語ならば獨逸國を發見するもの也、すべて國語は其國人の思想を表はしたるもの、故に併せて英人を觀、獨人を識るものなり、諸子は英語讀本一冊のうちにも、英米人の理想を看取し、その思想の不屈なる所、健全なる所に注意して、其長所に倣ひ、また其短所に鑑みて我思想を發達せしめざるべからず、その學ぶ所の國語が、如何に其人の品性に影響を及ぼすかにつきて、一實例を擧げんに、予が陸軍士官學校に奉職せし時、獨英佛の三外國語に、各七八名の教官ありたり、然るに獨逸語の教官は、自ら獨立自尊、覇氣盛んに、佛語の教官は、概して快活自適、能く談じ能く笑ひ、英語の教官は、概して沈默にして勤勉なりき、これ或は偶然なるべきか、また他に複雜なる原因ありとせんも、少くとも其國語の表はす思想を通じて、其國人の品性の片影を及ぼすの傾向、全くなしとは云ひ難き一現象なりと信ず、

予は茲に外國語によりて、外國人の思想を看取して、其長所を取り、自巳が品性修養のたすけとなせよといふ、然れども外國語を學びて、外國人の長所に心醉せよとは言はず、崇拜せよとは言はず、予は彼の一種の薄志弱行の輩が、僅に外國語を解して、直ちに其國人の足下に膝行するものあるを嘆ず、諸子はよろしく特立自重、たゞ彼等が長じたる所を、諸子が藥籠中の一材料となせよといふ也。

また數學につきて云はんか、數及び量に對する研究の外に　更ま修身上に於ける大教訓を得ることに留意せざる可らず、殊ま不規則なる腦隨を、組織的論理的ならしむるは、此數學の研究にしくものはなし、一點の

曖昧模稜をゆるさゞる此學科に於て、明晰なる決斷ある思想を養成することを努めざる可らず、殊に空想に耽り易き青年時代に於て、常に軌道を逸せんとする客氣の時代に於て、常に冷靜嚴峻なる此學科の教訓的一面を看取することにつとむれば、其効豈に有形的の術を得るが如きものに止まらんや、更にまた二と三とを加へて五を得るの外、永久に如何にするも他の結果を得る能はざるが如き、九十九に一を加へざれば未來永劫ま百とならざるが如き、一の教訓的意味なしとするか、「直線は二點間の最近距離」なる幾何上の公理は、人道にうつし來るもまた好箇の一金言をなすまあらずや。

其他如何なる學科に於ても、皆其學科の形にあらはれたる一面と共に、人道修養上の一面を吸收することに留意せざる可らず、要するに此等の諸學科皆綜合して、一の人格を造るものなることを忘却すべからず、實用的一面の輕んず可らざるや論なしと雖、要するま諸子は今人となるが爲めに學問をなしつゝあるなり、完全なる品性ま近かんが爲に中等教育を受けつゝあるなり、

然してまた實用上よりのみ觀るも、學術の目的は其有形の結果のみにあらずして、其これま達する迄に、經過すべき各部分に於て、一の大なる價値を有す、之を算術例すれば、の効は其答解よりも寧ろ其答を出すの道筋にあり、如何にすれば正確に其答を得べきかと苦心するの考索中ま在り、これ予の云ふをまたざる所なりとするも、諸子にして悉く此理を知らば、解式によりて數學宿題の苦を免がれ、直譯講義獨案内等により て、英語下讀の難を免がれんとするものなかるべき筈也、然らざるは此苦難の中に、其課目ま關する實力はもとより、之ま伴ふて品性修養の上に、甚だ大なる教訓を得ることを忘却したるものにあらざるなきか、しかも其苦難を免がれんとするは、更に大なる苦難を招くべき眼前の理を忘却したるものにあらざるなきか。

諸子にして、何故に自巳は此學問をなしつゝあるかに一考する所あらは、試驗の爲に勉强するものもなかる

べく、試驗に於て一時の僥倖を得んとするものもなかるべし、所詮、諸子の試驗場に於て監督者を要する間は、諸子は自ら何故に學問をなしつゝあるかを眞正に識らざるものと斷言するに躊躇せざる也

◎名山大川に對する謬想よつきて

新井無二郎

『天地正大氣、粹然鍾二神州一、秀爲二不二嶽一、巍々聳二千秋一、注爲二大瀛水一、洋々環二八洲一』云々の句は、水戸の東湖先生が我國風土の美を歌ひし者に非ずや。之れやがて、「名山大川生二偉人一」と云ふ、我國民の美的思想を代表せる者にして、所謂東洋の君子國は、此の秀麗なる風土と相俟たざれば、其の名を擅にする事を得ざりしなり。されば、此の思想は古今の好雅題となりて、或は清潔なる詩壇の林に花を飾るゝも、或は不言の敎育者となりて、精神界の皷舞者となるにも、常に一種の天使たるを失はざりき。

近江國は、古來最も趣味ある歷史を有すると共に、最も風景に富める地なり。特ゝ其の景ゝ於ては、殆ど全國の美を代表し、縮寫したる者と云ふを得べからむ。此地近世の偉人として現はれし者には、儒者には中江藤樹、勤王家に淺見安正、國文家に伴蒿蹊、俳諧に山崎宗鑑、榎本其角、森川許六の輩あり。嗚呼之れ等幾多の俊才豪傑は果して山紫水明の、悠々たる自然の景に孕まれて、德化し成業したる者なるか。否々、人は刺戟により、敎育により、勤勉によりて後、異材の人物とも、英雄の士ともなる者なり、區々たる山水秀麗の地、いづくんぞ能く國民を玉にする事を得む。

記憶せよ、山水秀麗の地よく偉人を生ずる者に非ず。却りて偉人の爲めに、其の景を神にし、潤色し、發揚し、遂に美的理想の熟語となりしに過ぎざるなり。一定の業務に服せずして、花をあはれび、月を弄ぶものは、或點に於て、社會の遊民たるを免れず。且つ閑散無事は、人をして墮落せしむるが如く、文字に於ても、優美典雅にして、實用に遠き者のみを穿鑿する時は、思想をして墮落せしむる恐あり。吾人は疑ふ、我國民が精細なる觀察と、微妙なる研究とに短なるは、或は粗笨なる詩的趣味に溺れたる缺陷の、影響する所なきか。換言すれば、名山大澤對偉人的思想の誤解によつて、激勵進取の氣慨を欠き、「自然の大景に放浪す」と云ふが如き、緩漫なる第二の性を作る者なきか。試に見よ、今日の青年が作れる詩歌文章を、概ね古人の口吻を摸擬し、常套なる文字を陳列して、景致の一端を舒ぶるに止り、彼の幽玄なる學理を述べ、緻密なる情操を描く者稀なり。吾人は未だ自然の美を解する腦力なき者が、徒に習慣的迷想に驅られて、空漠迂遠なる流行歌を詠じ、若しくは、流行文を作爲するをもて、文學の能事終れりとする者は、恐くは緻密なる腦は散漫となり、進みては遊惰に陷り、傲慢に流れ、研究を欠き偏狹に失し只一の自稱文學者として、社會に生存するに過ぎざる者あるに至らんことを悲む者なり。

一人先づ唱へて、万人之に和す。和することの不可なるに非ざれども、その弊や蛙鳴蟬噪と撰ぶなきに至りては、變調の聲、人をして聞くに堪へざらしむ。古來碩學篤行の士、或は慷慨憂國の人が、時事ゝ感じて景を歌へる者、いかでか今日の青年が、一時の遊戯的文字を羅列する者と、同一ならんや。この故に意氣文字の外ゝ踊躍して、金石の聲、佩環の響は、直ちに人をして、感奮興起せしむるに足る、此に至りて景も則ち神あるなり。

花鳥風月のもとに生息して、優悠閑吟するは文學の末技のみ。章句を尋ねて、花木を剪裁するが如きは、業餘の一戯なり。何ぞ多忙複雜なる活社會ゝ立ちて、活動すべき素を作るべき青年の、事とすべきものならんや。云ふ勿れ名山大川と、名山大川の外豈に趣味ある山水なからんや。否、世に顯はれぬ、人の云ひふるし、人の見ふるさぬ所に却りて眞價ある山水を發見する者なり。學業の餘暇、時に名も知れぬ幽溪の奥を探り、人

訪はぬ苔の細路のあなたにも跋渉を試むべし。歴史に、地理に、動植物に、礦物に、眼に觸るゝ處は、悉く新研究の素たらざるはなく、學理上の大文字は實に此の間より滾々として湧出するなるべし。一室のうちに坐食俯仰して、天籟の音を借らんとすればこそ、勢、咳唾を拾ひ、糟粕を嘗めて、点綴せざるを得ざるなれ。この故に思想は陳腐、文字は常套、一讀して何の感興も、何の利益もなきものなり。

近江八景は、我國の公園地なり。山村水廓の人も、都會繁華の士も、皆來りてこゝに遊ばんとす。此地に生るゝ者、何ぞ只神州正氣の鐘る所とのみ、歌ひて止まんや。須く此地を運動場として、朝夕學理の蘊奥を討窮し有益なる事業を計畫し、以て大國民的修養と、態度とを取るべきなり。詩に云はずや、白圭之玷尚可レ磨也斯言之玷不レ可レ爲也と若し如上の精神なき時は、八景の地は、正氣の鐘る處にも非ず、偉人の生ずる土よも非ず、只天與の景を空しくして、山水秀麗を歌ふべき資格なき人物に終らんのみ。清潔なる天使を、耻しめんのみ。

◎吾人の希望

第五年級　岩田榮太郎

人は進歩の動物なり、誰れか功名富貴を希はざらん、榮譽利達を望まざらん、幾多の偉人傑士が拔山蓋世の事蹟を見ては、偉人傑士たらん事を欲し、又英雄豪傑の傳記を見ては、英雄豪傑たらん事を望む、是れ人の常情にして何人も免るべからざる所なり、蓋し人は此の希望あるが爲めに能く人たるを得るなり、若し人にして希望なくんば生ける骸骨走れる尸肉と何んぞ撰ばんや、いかでか世に處して國を盛んにし家を興すを得んや、嗚呼希望なるかな、希望なるかな、實に希望は人生の主動者と稱するも過言にあらざるなり。

夫れ希望とは已れの爲し得べき事を希ひ、已れの行ひ得べき事を望むもの、則ち余の所謂希望にして、彼の安りよ已れの分限をも顧みずして宛かも天を仰て雲に乘せんとするが如きものは、吾所謂希望にあらずして、吾人の最も忌避する所なり、而して希望の遠大なるを要するは、先賢の既よ首肯する所なり、蓋し希望大ならざれば大人物たる事能はず、試に見よ、吾人富士登山を企て、不幸よして其の半腹よて斃るゝも尚ほ小丘より高きを得ん、しかるに初めより小丘を目的としたらんには、よく其の頂きに到達するも、何んぞ其の高きを誇るを得んや、況んや人事多くは豫想に反し往々其の目的の十が一よ達せざるに於てをや、故に希望遠大なるものは、よく破天驚地の鴻業を爲し、偉功を奏し、生きては青雲登龍の榮譽を荷ひ、死しては芳名を青史に垂る、豈に大丈夫の事に非ずや、之れに反して志望瑣々たるものは、小成よ安んじ徒らに目前の名利に齷齪し空しく醉生夢死するに至る、佐藤一齋曰く、人は須らく第一等の人物たらんことを期すべしと、實に服膺すべき言なるを信ず、誠に人の浮沈榮辱は其の希望の大小如何に因て定まるものなり、史に稱す、新井白石は三百文の青銅にさへ窮したる赤貧の身を以て大丈夫生きて封侯となる能はずんば死して閻羅王と成るべしとの大希望を抱きたりと、又項羽の少時流離落魄せしも秦の始皇の儀衛を見て大丈夫當さよ此の如くなるべしとの大望を抱持せりと、宜なるかな、前者は遂に從五位下筑前の守に任ぜられ、當時唯一の博學多才の人物となりたり、又後者は五諸侯を指揮し遂には强秦を亡ぼし、自ら西楚の覇王と稱するに至れり、吾人の希望豈に復遠大ならずして可ならんや、今や優勝劣敗、强食弱肉の演劇は益々旺盛ならんとす、此時に處するもの何んぞ區々たる情實よ羈束され瑣々たる名利に拘泥して遂よは人生の方向を誤まり碌々朽死するを得んや、須らく確固たる雄大の志望を抱き鋭意奮發して、祖先の偉烈を繼承し、以て大和民族の本領を全ふせずして可ならんや。

然りと雖とも、漫然大希望を抱持するも、實行之れに伴はずは徒に壯言大語の笑を招かんのみ、何んぞ稱す

るに足らんや。

熟々考ふるに、今や文明日に進み月に新なり、從て生存競爭は愈々劇しく優勝劣敗は益々盛んなり、此の時に當て誰れかよく目的の彼岸に達して、中原の鹿を得るものぞ、必ずや高才疾走のものならざるべからず、何をか高才疾走の者と曰ふ、金か元より必用なり、智か亦必用なり、然りと雖ども、此の二者より一層必要なるものありて存す、忍耐勉强の力即ち是れなり、見よ釋氏は十年の苦行を積み其の教理始めて世に行はれワットは櫛風沐雨の艱苦に堪へ、其の發明始めて功を奏せり、天下の事業皆此の如く決して輕々に爲し得るものにあらず、古人曰はく、事小なりと雖とも爲さゞれば成らず、道近しと雖とも、行かざれば到らずと、彼の徒に空想空望を抱き言行毫も一致せず、苟且偸安是れ事とし、一時を僥倖せする愚漢に至りては、もとより論ずるに足らざるなり。

抑々物に本末あり、事に終始あり、渡米せんとせば數千里の怒濤を蹴破せざるべからず、富岳に登らんと欲すれば歩一歩崎嶇たる阪路を登らざるべからず、しかるに航せずして希望の樂園に到り、勞せずして名利の彼岸に達せんとする豈に得べけんや、所謂緣木求魚とは此の謂なり、嗚呼英雄を氣取るもの必ずしも英雄たらざるなり、豪傑を眞似るもの亦必すしも豪傑たる能はざるなり、苟も志を立て偉大の功を奏し芳名を竹帛に垂れんとせば、必すや堅忍不拔の大志を抱き、勇壯活潑能く百難を排し、千辛を忍び百折撓まず千挫屈せず、大岳前に崩れ巨流後に漲るとも、毅然として動せず、剛乎として恐れず、益々其の素養を蓄積し、秩序的階級、正道的順序を踐みて、歩一歩、日一日、拮据奮勉してやまずんば、朱子の所謂、陽氣發處金石皆透、精神一到何事不成の語を証明する又容易ならん。

今や東亞の風雲日に急ならんとし、貪噬厭くなき幾多の豺狼は我隙を伺ふて止まざるなり、今後の社會に立たんとする、青年の責任の重大なる思はざるべけんや、嗚呼此の重且つ大なる責任を荷ふ吾人青年たるもの、安んぞ徒らに眼前の名利に眩惑され空しく醉生夢死して可ならんや、神州男子の天分を忘却して可ならんや、須らく遠大の希望を懷抱し躬行實踐以て他日の大成を期せざるべからず。

◎神州男兒の本領

第五年級　三木曾次郎

巍峨峥嶸たる芙蓉の峰、白扇を倒にして東海の天に懸り、渺茫浩蕩たる琵琶の湖、明鏡を磨きて東山の地に清く靈なるもの、豈獨り琵琶の湖のみならむや、然らは則ち何を以てか能く、宇内萬邦に勝り、世界列國に誇るべき者ぞ、曰く凜々たる大和魂是なり。

夫れ大和魂とは何ぞ、剛膽鐵腸進取壯烈、物に恐れず事に動せず、果斷勇決、能く是非を判し曲直を別ち、忠勇孝悌君父に事へ、信義誠實人に交はり、兄弟愛敬し長幼和睦す、然り而して一且國家に事あるや、身を以て大難の衝に當り、只た一死以て國家に報するの義氣外に溢れ、勇鬪奮戰斃れて後已むあるのみ、試みに看よ、既往に於ける我祖先か如何に大和魂を振起せしかを、神功皇后か澎湃たる万里の波濤を蹴破して三韓を征し北條時宗が元兵十萬を筑紫の海に殲殺し、豊太閤か鷄林八道を蹂躪し大明四百餘州を震駭せしめ、山田長政か雲外萬里の暹羅王を援け以て一國の政權を握り、濱田彌兵衛か輕舸單船南蕃諸島を征伐したるか如き事大小の差ありと雖も、皆凜々たる大和魂を振作し、以て鬱勃たる氣慨を發輝したるものなり、嗚呼是れ眞に神州男兒の本領にして、宇内列國に卓越する所以にあらすや。

飜て今日の神州男兒を視よ、果して昔日の如く勃々たる大和魂あるか、吾人思ふて此に至り、轉た惕然として恐れ喟然として嘆せざるを得ず、秦西の文物一度我國に入りしより、上下文弱に流がれ太平に狃れ、道德墜に地ち陰雲天に塞かり、隨ひて歐米崇拜の風と化し、輕佻浮薄の俗に陷り、遂に其極閃々たる劍光よ膽を冷やし、轟然たる砲聲に身を震はすに至り、神州固有の大和魂は殆んと將に地を拂ふて去らむとす、豈慨嘆よ堪ゆへけんや、諸子よ活眼を開いて今日の形勢を一看せよ、世運次第に推移して外交益繁げく、時運運りに變遷して生存競爭愈劇しく、昂然寰宇の間に馳騁し、機械の發明は天涯を咫尺にし萬里を比隣ならしめ、堅を碎き强を挫く金城湯池も、今は恃むよ足らざるに至らしめしに非すや、蓋し外交の事たるや表面は固より訂盟修交の名ありと雖も、若し其裏面を察すれば、翼を張り爪を磨し、陸に百萬の貔貅を連ぬ海に數百の艦艦を浮べ、併呑攘奪を事とし、垂涎三丈眼を東洋の波上よ注き、覺隙を覬覦し鴟梟の慾を逞ふせむとす、嗚呼一髮千鈞を引くの情態豈危急存亡の秋ならずや、而るに同胞察せず啻に浮華之れ事とし、一たび憂國の言を吐けば迂とし陋とし、怒らざれば笑ふ、余實に切齒扼腕慷慨悲憤に堪へず、覺ゆす大息長嘆せざるを得ざるなり。

嗚呼目よ芙蓉の峰を眺め、身は琵琶の湖よ浴し、上に皇統連綿たる一天萬乘の聖君を奉し、下は忠勇武烈の祖先を有したる神州男兒よ、かゝる畏るべき弱肉强食優勝劣敗の場裡に立ち、能く廿世紀の初めを經綸せむと欲するもの、須く汝か肝胆を練磨し、大和魂を振起せよ、奢侈に流れ柔懦に失し、徒らに高枕安臥は汝が一大恥辱にあらずや、孜々汲々業を爲し事を勉め、祖先の偉行に鑑み、奮然蹶起尙武の國風を振起し大和魂を興張し、上は皇室を泰山の安きに置き、下は四千萬の同胞を救ひ、芙蓉の峰をして益高からしめ、琵琶の湖をして愈清からしめ、以て純然たる帝國を東洋の波上よ安置し、日章旗をして歐州の天に輝飜して、以て廿六世紀の新日本を組織し、彼の赤髯碧眼の奴輩をして背後に瞠若せしむるが如きは、眞に神州男兒の本領なり、嗚呼神州男兒の本領、夫れ實に是にあり。

◎史上の英雄

第三年級　勅使河原佐太郎

吾人は常に歷史を讀む每に、過古の英雄豪傑を罵詈せずんばあらず、吾人は彼等の不當然の功績を鑑三文よ安賣せんと欲するなり

彼等の功業とは、個人的野心若くは家族的慾望の結果を賞揚したる言のみ、彼等は社會を改造す可く最惠至高なる社會總体の依托に由て、或時代に出現して自然の天職を遵奉したるものにあらざるなり、彼等は人爵の榮華に飽かんと欲して權謀術數且作戰格鬪せしなり斯くて精神的に人を殺し、肉体的よ人を斃し、以て自英雄と稱し豪傑を氣取れりしなり。

乃ち知る史上の英雄豪傑は、制裁す可き權力者なき場所と時代に現はれたる强大なる犯罪人なり、彼等は無辜なる人間の血を吸ひ骨を嚙りて、犯罪を成就せし非道者なり、若し歐洲に彼の時何者か制裁の存せば、那翁は一種の殺人犯罪者なりしならむ、若し支那の天地に不可抗力の制裁ありしならば、秦の始皇は英雄として死せざりしならむ、若し日本の山河よ英雄の非道横行を抑制するものありしならば、秀吉は矢矧橋上の乞食の親分株にて終りしならむ、而して世人は又セントヘレナ島に於て、黃河の畔に於て、阿彌陀山陰よ於て、腐り行きし髑髏に向つて、後世の輿論は公平に嚴格に論難して其人物を否定せしならむ、是れ其犯罪に對する制裁なればなり、故に今日より見たる那翁始皇秀吉は、彼等が得意時代に於ける那翁始皇秀吉よりも寧ろ小なりといふべし。

歴史は將來の指南車となり、現世の人間に自己と人及社會との關係を教ゆるものにして、國家は之を標的として以て生存活動するものなり、然るに思慮見識なき史家は、徒らに其英氣に魅せられて、史家としての天職を忘れ自ら其服從者の一人として、曲筆阿從玉石混合、唯其人物を偉大ならしめむことを力む、これ名譽と両立せざる罪惡に、月桂冠を賄賂するものなり、然れど價格は實力を意味す、實力以上の價格は明ゑ懸直なり、それ形は眞正なり、形以外の大さは影なり、吾人は後世の人をして、この懸直と影法師に欺罔せられざらんことを希望す、時代を遠く隔れたる世俗の所謂英雄豪傑の、偉大らしく現世の眼に映ずる大部分は實ゑ是れこの懸直と影法師とのみ。

◎青年の本領

第三年級　飯村祐念

我國維新以來未だ四十年を經ざるゑ、文物燦然として備はり、武備嚴として整ひ、東洋の英國を以て稱せらるゝに至りぬ、盛なりと云ふべし。

今日宇内の形勢を觀るに强は弱を制し、弱は强に呑まれ、生存競爭、日を追ひ、月を增すに順ひて、益々激甚ならんとするなり然るに、翻て我國民の氣風を觀よ、眞ゑ國家の動脈とも謂ふべき、進取の氣象は腦裡ゑ洽きか、偶々ありと雖も、山田長政の如き、西鄕隆盛の如き、果して幾人かある、東洋の英國の稱は適當するか。それ淸にまれ、印度にまれ、西班牙にまれ、衰滅に瀕したるは其國の小なるに非ず國防の備はらざるに非ず、國民の氣風腐敗の招きたる結果に他ならざるなり。

我國現今の缺点とは何ぞや、實に固有の道德は地に墮ち、是を見て敢て挽回せんとする士の少なきにもよるあれど退いて學生の氣風を見よ、實に志氣なく、抱負なく、偶々壯言する學生ありと雖も、惜むらくは其志望を成就する勇なく、又忍耐なきが故に、言行一致する能はざるを如何にせん。

誠に輿地圖を播き、眼を我國の北邊に放つときは宗谷海峽を隔てゝ一大島の横はるを見ん、嗚呼此島此半島は、如何なる關係あるか、眼を拭ひて之を講ずべきは吾人學生の勤ならずや、嗚呼二十世紀の繼續者たる、我國の青年よ、殊に身を中學の窓に投じ、朝夕智を研き、德を修め、身を鍛ひ、中堅國民の要素を作りてある學生の任務や重、且大なりと謂つべし。

若しそれ一朝東亞の天地、晴澹たる妖雲潰裂し、幾千の艨艟は、怒濤の聲と俱に、東北を蔽ひ、幾百萬の貔貅は奮の聲と俱に、西南を蔽ひて、到るときに際せば、我大和民族、忠勇愛國の士、速に往きて、是が對抗應戰に努力せざるべからず、之れまた、其責は一に我々學生の頭上にありと、覺悟せざる可らず。

文苑

服部愛軒

◎鷄鳴書院記

余寓東京前後二十年。幸得交當世賢士。或以博學多聞。或以卓識達見。或以寛厚篤實。而正直侃侃氣節自高者。爲宮内士通。士通伊勢人。夙遊土井晷牙先生之門。學成官遊四方無所遇。歲于支入東京。垂帷授徒。時漢學衰頹。故老又多凋落。而新學小生。衒虛名。疎實踐。非門戸相排。則朋黨相閧。士通嘆曰。人必自侮而後人侮之。斯文之衰。學者自取之耳。有一老儒。性好貨。開口輒曰利。其說云。利有公私之別。世儒知私利之可鄙。而不知公利之可貴。非陋則汚矣。是以門人往々講財利。甚則有稱貸取倍息而揚々自得者。士通不能堪。一日與老儒相見曰。聞先輩平生有公利私利之說。愚則以爲公則義而非利。利則私而非義。方今人情菲薄。唯利之求。先輩不務所以匡救。乃有此說。且公利者孔孟所未言。不知尊說有何據。縱令有據豈先輩所宜言哉。傍人皆失色。其人赧然不知所答。其氣節概類此。士通既不得志。嘗慨然曰。窮通命也。我當求在吾者而已。於此益自刻苦。鷄鳴而起。讀書之燈恒耿々。遂扁書院曰鷄鳴。自程朱陸王之說。至老莊申韓之書。無所不窺。爲辭章。醇正雅健有眞氣。家貧室如懸磬。而處之夷然。性嗜酒。客至則舉杯論文。酣嬉淋漓。醉後好朗吟左太仲振衣千仞岡句。意氣蓋世。人皆壯之。而余獨悵然悲其才不爲世用。坎軻窮困漸將老也。士通頃者謂余曰。知予者莫如子矣。願記吾書院。余不能辭。乃叙平生所知見如此。

服部愛軒

◎書碧梧翠竹集後

嗚呼。此確堂中村翁之所著也。而其人今也則亡。余安忍手之哉距今二十年。余之就職於埼玉縣中學也。始得知翁。翁水口人。夙有文名。齡殆五十。辱忘年之交。既而去之京師。厂魚往復。每一篇成。必寄示曰。京師無可共語者。子其評之。京師昔稱多能文之士。今雖云衰乎。豈無二三同好者。然而特眷々於千里外一故人如此。可不謂知已乎。翁天資懇摯。尤厚人倫。此集所載若賀世子加冠序。上家大人書諸篇。不獨文章優時輩。亦可以見其爲人也。明治初朝廷新開史局。徵四方能文之士。翁亦與焉。既而辭職。蓋晩年不得志。此著之成。寄一本曰。吾近年羅病。理不能久存。半世所作不忍付堙滅。藏書以刻之。後世或知有中村某者也。余竊悲其意焉。又以爲翁雖老且病。文氣毫不衰。未足以爲慮也。既數月訃音忽到。嗚呼翁豈知其死期歟。將其言之爲讖歟。余安忍乎之哉。然思翁而不見。見其心血所注。則猶見翁。余又安忍不手之哉。服部章收淚書其後

◎登牛尾山記

第五年級　林富之助

山城爲國多山嶽。其著者三十六峯。就中比叡愛宕牛尾爲最矣。余嘗登比叡愛宕。觀其雄峻巍峨之狀。而牛尾則未也。今茲庚子七月二十五日。欲登牛尾。取路於京津街道。左轉過小山村。而入觀音路。有稱蛙巖者。其形類蛙。因得此名。仰連峯而俯曲磵。左顧右眄。步々入佳境。途有屏風巖。亦其形類屏風。有磵稱蛇潭。相傳往古有大蛇焉。捕人畜。內海某者誅大蛇。得奇藥。爾后傳家。所謂山科金屑丸是也。既而達山門。境內有大木。稱天狗杉。鬱々蔽天日。爲怪羽棲處。院之側有墨壺巖。其涌泉墨色所以得名也。鶴客來而代墨云。漸而達山巔則。白雲擁山腰。眼界曠豁。眺望頗佳。若遠若近。方東北渺々磨一大鏡面。白帆点々。如鷗如鷺著。琵琶之湖也。其北方彩霞模糊而點立欲衝天者。比良比叡峯也。東面粉壁櫛比。高樓相接而豆人寸馬。往來如織

者。大津之市街也。西南蜿蜒如白蛇。劃山野之間者。淀江之流也。余性有煙霞之癖。欲醫而未能。其登比叡也。以未登愛宕爲憾。既登愛宕也。未慊乆登牛尾。劉文叔所謂得隴望蜀者乎。嗚呼。人之不自足。率有類乎此。可不深警哉。雖然較之世之求名利不知饜足者　或有間焉。日暮還家遂記　（服部先評生点）

◎題征清圖卷

第五年級　岩田榮太郎

劍光電閃。彈丸如雨。戰塵慘憺天地爲暗。其一軍飜日章旗。突進硝烟彈雨中鏖殺敵兵。勇氣凛烈。無不一以當十。一軍則擁黃龍旗。兵皆辮髮意氣銷耗。惶惑畏頓。相爭遁逃者。不問知日清戰爭圖也。雖不知成何人筆。生氣流動如觀實戰。蓋此役我戰而無不勝。攻而無不取。其故何也。彼豈以版圖不大乎。彼地十倍於我。然則以兵數寡少乎。將糧食不足乎。兵數與糧食。彼皆倍蓰於我。然而我勝彼敗抑又何哉。孟軻氏有言。天利不如地理。地理不如人和。彼人口實超四億萬。而惟四億萬心。我人民不過五千萬。而惟一心。使四億萬人而四億萬心者。與五千萬人而惟一心者共較。勝敗之數不待智者而知也。抑又聞之。兵無名者敗矣。彼初乘朝鮮衰微。以兵力壓之。是所謂貪慾無名之師耳。夫師無名則氣不振。氣不振則心必疑。氣萎心疑者。欲不敗可得乎。宜矣一敗塗血如此也。雖然喬木多受風。勝者爲人所忌。是天數人事所不免也。世安知耽々虎視不有伺我後者哉。我國民者。益奮勵不可不以備他日也。有感題一言於圖後。　（服部先生評点）

◎養老まいたる記

第五年級　村上善正

養老は古來孝子の英名と共に、瀑布の壯觀を以て其名著しく、避暑地として最好地たり、我校に於ても既に一遊を試られし諸氏多かる可し、余は曾行程の概畧を述べて、本誌の餘白を汚すのみ。

葉月七日一友某一書を以て該地の夜行遊を促す、余欣抃之を諾し、本日午后第十一時俱に輕裝搏飯を腰にづ竹杖芒鞋以て路程に上る、此夜日來の微雨一霽し、蒼穹清鮮にして唯殘雲の四山に点々たるのみ、村を出しれば團々たる玉兎已に東天ゑ登り、皎々輝々宛も電光の如く、夜猶晝の如し、鳴蛙閣々として相合す、眼を左右に放てば萬頃の沃野連亘し、田稻翠々玲瓏として滴るが如し、凉風颯々として來れば瀲灩たる波浪を起し、月光之に映じて青光を發射し、一見海洋の如く、身は海岸を旅するの思あり、其奇觀言ふべからず、覺ゑず絶奇と呼ぶ、東に歩する一里宮部を過ぐ、折れて南行する十町、一大橋架を渡る、是即姉川に架するものにして名けて國友橋と云ふ、姉川は白砂蜿蜒屈曲して田園の間を灌流し、宛ら白龍の横るが如し、橋を渡れば畦畔の徑路ゑ出づ、時に渴最甚し、然れども廣漠たる原野飲むに水なし、須臾にして榎に着す、西方ゑ社詞あり、即ち入て憩ふ、古松老柏陰翳鬱蒼、忽ち潺湲たる流水の音を聞く、巡視すること稍久し、社前泉地を見出せり、水清冽透明鏡の如し、大に喜び掬ひて渴を醫す、其美味肥肉名酒も遠く及ぶ所にあらず、一掬の量忽ち筋骨を增すが如し、零時半此地を發す、又南する數町舊鐵道線に出づ、此道は長濱より關ヶ原に至るものゑして、數年來廢線となるをもて危險の憂寸毫なし、故に線路ゑ隨ふて東す。伊吹山は雲烟の際巍然として獨り群峯に秀で、倏ち現れ倏ち隱る、七尾山は其西北に位し、虎豹の蹲踞して一躍伊岳を飛越せんとするに似たり、觀れば西方遠く黑雲披靡し、恰も一帶の連山をなし、嫣然として予等を送る、實に四面一葉の圖畫を以て包むが如し、愈進めば人籟都て絶ゑ、寂として斷腸の元あり、只蟲の草中に吟ずるを聞くのみ、切々唧々怨むが如く、慕ふが如く、幽懷を語るが如く、人をして覺へず神魂を動かし、人世の外ゑあるかと疑はしむ、已ゑして再姉川の南岸に出づ、對岸一奇峰あり、全山奇石怪樹を以て成り、碎けんとして筐に支ふるに似たり、此地は姉川の古戰場にして、淺井長政織田信長と戰ふ所、昔時は川幅八町の廣さに達

せりと云ふ、然りと雖年を經世の變遷に從ひ、今は僅に其六分の一を有するのみ、暫時休憩の後再び南行すること一時間、春照驛に達す、之れ伊吹山の南麓よりして一呼應答の所に位せり、當山は日の出の美觀を以て登山の士常に夥しく、殊に夏期を以て最佳とす、此に於てか遊意勃然禁ずる能はずと雖、如何にせん前程猶遠きをもて、足の疲勞を恐れ遺憾ながら後日を期し、左に伊岳を右に廣茫不測の田圃を見つゝ山麓を東南に沿ふて進む、時正に午前二時(八日)夜最深し、前路に當り忽ち狼と覺しき吠聲を聞く、覺へず震慄、即ち其に旅行「ナイフ」を手にし、勇氣を勵まし、來らば來れ一擊の下に刺殺せん、青年男子何ぞ汝等が餌とならんや、精神勃々たり、何時しか聲を後ろに益進めば、稍疲勞を生じ、步調頓に鈍し、盖し此に至る迄六里の里程既に至れり、今は關ヶ原も一里の內にあらんと、疲足を運ぶ十餘町路分岐す、一つは平原、一つは山脈の間に走れり、余嘗て聞く、近州より濃州に出づるの國堺藤川越しあるを、因て山道に進む、仰げば両側青巒疊々嶺岷削るが如く、或は細泉竹を穿ちて來り、或は樹木參差斷續して小瀑潨々其間より噴出し、或は巨巖磊落攢列し溪水撞舂して鞳々聲を發し、或は懸樋滾々頭上に懸り實に悽然肅然凜乎として留るべからず、折しも一天瞑朦黑雲狂奔し、迅風颯々として雨霏々たり、遠く前面を睹れば、高山連續其極限計るべからず、愈進めば降雨益强く、薄張の編笠以て身を蓋ふに足らず、乃ち雨を樹下に凌ぎ晴るゝを待つ、抑此阪は山賊群狼屢々人を害すと云ふ、然り而して此阪果して藤川越なるや否や、亦知るべからず、時に雨は篠を衝いて來たり、再び進まんとして進むべからず、退かんとして退くべからず、神震ひ魂動き、毛髮疎然として立ち、皮膚爲に粟を生じ、茫然として成す所を知らず。

忽然日清戰爭我軍の勇武の狀を想起し、蹴起扼腕友を呼で謂て曰く、向きに我軍の淸を征するや、時正に盛夏にして炎帝熱を放て四海爲めに沸き、津々たる流汗膚に充滿して憩ふに蔭なし、而も彼將卒は嚴として規律を亂すなし、何ぞ勇猛義烈なるや、若夫隆冬に至りては降雪路を埋むること丈餘、朔風凜列として肌を劈き、指を墜し、足を傷く、而して其凍除くに法なく、其寒溫むるに爐なし、而も彼士卒は毅然として屈する色なし、何ぞ其誠忠壯烈なるや、斯くの如き荒原、斯くの如き寒夜、快哉を呼し、彈雨を冒し、砲烟を衝き敢て恐るゝなし、之れ我軍人の本領にあらずや、大和魂にあらずや、嗚呼前途多望の青年たるもの、かゝる小岳に路を迷ひ、窮苦の界に陷落畏恐す、豈恥つべきの至りならずや、古語に曰く、艱難汝を玉にすと、今日の困尼天吾人の精神を試んとす、子以て如何となすや、友聞て以て誠に然りとなす、互に勇を鼓して進む、已にして雨晴れ天色拭ふが如し、此に於てか靜寂一轉意氣揚々、奮進すること半里遂に阪を越ゆるを得たり、山脚茅舍を見る、直ちに戶を叩き地名を問ふ、老婆褥にありて頭を擡げ答て曰く、是藤川越にして關ヶ原迄一里に餘れりと、言終らず欣喜雀躍、足の置く所を知らず恰も疾風怒濤を侵して彼岸に達せし思あり、再ひ連山の峽路を進む一里、時に般々として轟き渡る山寺の鐘、餘音搖曳して遠くいたる、然れども未だ糢糊溟濛として明ならず、已よして風動き霧開けば、關ヶ原は遙に呈露す、路傍碑あり、青苔氈の如く古蝕讀むべからず、此地德川氏石田氏の師を敗りし古戰場なり、嗚呼茫々三百年青山流水は歷勃の觀を留めて千古依然たるのみ、感慨佇止すること之を久ふす、稍ありて關ヶ原に着す、停車場に於て朝餐を喰し、疲勞を癒す半時、六時出發して之より養老に向ふ、行くこと二里正に牧田川を渡らんとすれば、夜行の勞は益々加はり、目は閉ぢ足は重く、一步一休進むを得ず、即ち川に下りて枕席すれば、忽ち昏睡前後を知らず、轟々たる車聲に驚き醒むれば、旭日三竿往來繁し、即ち含嗽塵を拂ひ養老山を繞りて、高田町の西方を過き、遂よ養老に到着す、豆馬亭に投ずれば、時計は已に九時を報じぬ。

◎竹生島紀行

五年級　松居源四郎

春既につきて落花吊ふよは、時おくれたり、いでや竹生島の新緑、滴るが如き所、波跳て白龍岸を嚙む巖頭に嘯き、しばらく長空に參じて、吾家一日の日記を清めばやと、力石廣瀬の両子と、彦根をあとよ松原をへて、濱傳に長濱を志して進む、

日はすでにのぼれり、碧空一沫の雲だゝなく、風吹きすさみて、磯うつ波いと荒し、松原村をすぎて再び濱邊に出すれば城山の鐘七時を報じぬ、砂地蹈みしめ語りつゝ行くに、よせてはかへす大波小波、飛沫衣の裾を濕す、水禽二三羽波の間に漂ひて、對岸の山々淡紫にうちかすめり、磯山を越へて、漁村に入り、迂廻して濱に出すれば、路傍一帶の草花、濃き紫色して、麗はしく咲きつらなれり、われ等其の名を知らず、たゞ芙蓉に似たれは、芙蓉草と名付けむかと力石子云ふ、

筑摩の森影に暫しやすらいてのち、またも歩を續けぬ、桑畠連なる小徑をたどれば、桑つむ人の冠手拭あなたこなたに見へて、歌にぎわしく聞ゆ行きてとある葦生ふる中を過ぐれは、廣瀬子一つの白骨を拾ふて示す、人の腕骨らし、あはれ唯が浮世の夢のかたみぞや、明日は誰が身と何人のいひけむ、人の身のはかなさ、今更に胸にしみて、廣瀬子の人世觀を說くに、力石子と予とは、默聽しつゝすゝむ、

長濱に入り、波止場に至れば、風は既になぎで、十時發の滋船間もなく予等を乘せて阜頭を離れたり、竹生島は波の上にそば立ちて、予等を迎ふるが如し、舟は波を切て走る三等室のむしあつく、胸くるしきに、甲板に出で、四方の景色を眺むれば、ゆきかふ白帆、霞に消ゆさる樣、山のすがたなどの面白く、心地よき風袖を拂ふ、

滋舟は竹生島に着きぬ、下るものは、予等一行と合せて六七名、小舟に乘り移りて島にのぼる、

嶋の周回一里と云ふ、寺あり社あり、又二三の人家ありて、各岩によりて建て、滿山樹木生ひ茂りて、若葉綠すゞしく、竹叢所々萌黃色を点ず、先づ石壇を登りて、辨才天に詣で、竹生神社を拜し、大慈大悲の觀世音を伏し拜み、廊を傳ひて、湖よのぞむ、一樓に至れば、四望豁然湖岸の連山かすみて、來往する眞帆片帆、あなたこなたにゆきかひて、南方山と、山と、接せんとするところ、水天將に接せんとして、髣髴夢の如く淡し、寺僧に乞ひて一室に入り、湖の景色を眺めつゝ、午餐をしたゝむ、

島をめぐらむとて、小舟を雇ふ、舟は浮び出でぬ、波あらくて、舟の動搖激しきに、幾度かよろめく、島の一角を過れば、たゞ見る巨岩重疊苔むしたるが壁塀をなす、舟子はこれを指して屏風岩と云ふ、藤あり艶紫うるはしく咲きみだれ、蔓長く垂れて水に接せんとす、島のさゞ舟の進むにつれて變りゆくに、

掛聲勇ましく、舟こぐ舟子に「斯くの如き、閑幽の孤島よ、此佳き景色をながめつゝ、暮しなば、如何に樂しからむと、」友の云へば、「否吾等たつきの爲めなればこそ、斯く不自由なる、孤島にわびずむなれ、誰か好むで、かくの如き、寂莫の地よ、住まんや、されど君よ、大月天心にかゝる夜を、梢拂ふ風、巖うつ波の外は、寂として聲なき頃、ひとり空を仰をげば、身は何となく、此世にあらぬ、心地せられて、また此島を去り難く思ふ事あり、」と舟子は答ふ、面白の語哉、友の竹島を指して、さても變るものかな、常に見れば青螺の如き竹島の、今は如何にや二つに見ゆると云へば、舟子はさなり此れ竹島の、七化と稱するなり、日によりて丸く、或は長く、また今日の如く二つに、七度形を異にすと云ふ、

島の後に出れは、波いとあらし、此あたり、琵琶湖中最深の所にて、五十余尋ありと、岩の姿、木立の樣、殊にながめよし、小鴨二羽岩間よりけたゝましく、波の上をあなたに飛び、波に入りぬ、舟は廻つて島の北に出づ、巨岩あり、獨り島のほとりの、湖中にそば立つ、小松二三本小詞あり、小さき華表半ば朽ちたり、

此あたり藤花多くて、紫房波よ映じて、ゆらめく、虎の狂へるが如き、岩をめくれば、もと舟出せし所に着きぬ、舟をすて、前よ借りおきたる、室よ入り、色々の談して、うち興ず、忽然滊笛吹き鳴して、滊船は入り來れり、予等の乘るべきは、午后六時發なるに、こは如何にと、いさゝかあわてゝ寺僧に問へば、今着きしは塩津行なりと云ふに、やゝ落付き、欄によりて見下せば、六七人の西國順禮の一群、小舟に乘り侈りて、やがて島にのぼりぬ、滊船は直ちに西に向うて去れり、面白げに談しあひつゝ石段を上り來る、さきの舟より下りし一行、見れば年老いし男二人、女三人と、十才許の乙女一人、總勢合せて七人、何れも寺銘一面に押したる、おいずる掛け、管笠かむりて、杖つきたるが、着たる白衣は、永き旅路の雨風に垢じみたり、われ等の前を通りて、觀世音の御堂をさして、歩み去れり、

またも景色を探らばやと、波うちぎわの岩を傳ひて、屏風岩のほとり迄行けば、嶮しき岩にさへぎられて進みがたし、岩うつ波のしぶきを避けむとして、幾度か蹈みはずさむとしては、危く止まりぬ、滊船は再び着きぬ、乘客甲板上よひしめき合ひて、騷し、先を爭ひて島に登る老若男女、引きも切らず、蟻の如く石壇を登りゆく、やがて滊笛に促がされて、漸く舟に乘り終れば、舟はしづかに南に向ふ、予等の乘るべき舟は、未だ來らず、岩に伏して、談じつ興じつ、湖の景色を眺め居れば、身はわずらはしき、人の世よある心地せず、

あゝ舟は遂に來りぬ、吾等は歸らざるべからず、船に乘りて甲板に立ち、別れの語を島にあたへぬ、さらばなつかしの島、とこしなへにわれ、一日の清遊を予等よ與へしを謝す、さらばよ、

日は西に臼かんとす、夕ばへの雲あかねさして、余光を波になげ、きらきらとひらめく、湖面漸く暗く、四方の山も、森も家も、烟の如く消ゑさりて、竹生島は、夕霞の中に姿をかくしぬ、月あり、と友の云ふに、

見れば雲の間より、三ヶ月ほのかに匂ひて、又雲に入る　愛らしの風情や、

かすかに見ゆる、紅燈を目あてに、船は暗を縫ひて走り、やがて長濱に着きぬ、此所より再び九時發の滊船に乘じて、彦根に向ふ、夜なればにや、甲板吹く風寒くて、室に下り、夢に入りぬ、午後十時彦根よ着く。

◎伊吹あらしの一節

第四年級　澤村專太郎

さきつとし、われ伊ふき嵐てふもの語を草しぬ。あまりにながければ、二ふし、三ふし、ぬきとりて、こゝにかゝぐることゝはなしぬ。見ん人、その心して讀みたまへかし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

かな倉を距る程とほき山中に、むかし、賴朝公が建立せしてふ古寺あり。北條か大權を握るとゝもに、いつしか破れはてゝ、雨にうたれ、風よ吹かるゝまゝよ打ちすてられ、生ふる千草にみちさへ絶ゑて、八重むぐらの所得がほに茂るも心惡くしや。さるものから、草苅る少女、さては牛追ふ童だにたちいらねば、晝なほ寂として人聲を聞かず、たゞ名も知れぬ鳥の叫ぶ聲、ものすごく響くのみ。

かねつき堂の釣鐘は、さすがにして人の運び去りけん、影だに見ゑず、破れたる屋根に苔むして、柱にからむつたかづら、橦木の半ば朽ちたるが、蔓にからまれて、あやふくも落つるをまぬがれぬるさま、いと味氣なし。あはれ、ありし昔の面影を偲べば、坐ろに涙催されぬ。やれたる卒塔婆の朽ちはてゝ、土に半ばうづもれたるほとり、枯れたる尾花の風にそよぎて、その蔭よ空しくのこるされこうべの主や誰れならん、雨のそぼふる夕邊、青き鬼火のほのめくといふは、そもこの……

淋しき……かゝる淋しき山寺に、さてもいぶかしや、しげれる草の間に、人の足あとをもて本堂に通ふ

小徑、あらたにできぬ。はぶへて、里人はこを聞きつたへ、いつしか山賊のすみか、鬼長尾が假りの住居と、噂を立てぬ。

人の噂も七十五日とかや、やがてその噂もあとなくなりしが、それとともに、道は再び草もてうづめられぬ、もとの如くに、鳥は淋しく叫びたり……

※　※　※　※　※

……年は遷りぬ。星は變りぬ。

松影小暗き岡の上よ、一もとの墳墓、苔むしたるが淋し氣にたちて、旅人の袖をしぼらせぬ。

伊吹の嶺おろしさむく、吹雪のすさみしあした、やつれはてたる二人の旅女、この塚のかたへにこゞゐて鳥たゐたるが、相抱きて伏し居たりき。……

……と老いたる馬丁が傳へ語りぬ。

◎旅の一日

第四年級　松井太四郎

勇ましく砂地を走る腕車の響に旅路の夢を打破られ、床を蹴て起き、忙然と見廻せば、相宿せし商人は早くも起き出でたりけむ、臥床に觸るれども、暖氣だになし、驚きて傍の友をゆり起せば、漸にしてめさめ、つぶやきつゝ床を離れぬ、是なむ若州の僻地、佐田と呼ばるゝ里の旅ね、實に九月七日の朝のことなりき。

數椀のあさげに、力を得草鞋を新にし、いざ是よりと、宿婦の挨拶を後ろにきゝ、出で行きし時、日ははや今日も、我等をなやまさんと、既に東の山きは、二三間計り離れゐたり、十數町進みし頃、林のあなたに騷がしき音聞ゆ、何事ならんと、急ぎ行けば、近づくに從ひ、海の波岸うつなりと知られけり、大海望むはこの旅にはじめての眺めなりければ、互に無言の内によろこび、知らず〳〵足を早めぬ。

漸く濱邊にいたり、とある岩に腰打かけ、四方八方の景色、あます處なく眺めつゝありしが、友は感極まりて、大息つくに何故と尋ねければ、彼のいふ、余は既にはたちの、星霜を重ねんとするに、大洋を望むは之こそはしめなりけれと云ひければ、余もしかなり、實に吾々は井蛙書生には非ずやとて、互に笑ひつゝ渚を行けば、寄せ來ては玉とくだけ、碎けては搔き集むるが如くに退く男波女波、岸洗ふ樣のこよなう、をかしければ、思はず二人は立よりて、今しも、小砂を美しく洗ひ去りしあとを、こと更に足跡つけ、あるは杖もて字などかき、はた彩なす貝殼など拾ひ、石投げなどして行く、さながら十にも足らぬ、幼子の遊ぶさまなりけむ。

進み行く道は岸邊に沿ひ、或は山に入り、坂となりなどして平ならず、路傍の松幾十百株、青々として海にのぞむものは怪蛇の水に入らむとするが如く、亭々として天にむかふものは飛龍の雲を呼ぶが如く、臥するもの、伸ぶるもの白砂と共ゐ相つらなり、海を望めば奇岩、怪石、波上に隱見し漂へる舟の如きあり、龍虎の爭ふが如きあり、臥するものは橋の如く、立てるものは柱の如し遙かに淡く眼をさへぎるは、これ立石崎の裏手か、眞帆片帆の島がくれに漕ぎ行くは恰も時ならぬ、鷺の如し、眼を轉する毎に驚かるゝ絶景は旅の疲を醫するとゝもに、身は塵界を離れし如くにて只忙然たるのみなり。

飽かぬ眺めに時すぎぬ、かくては、と辛くも其の場を立ち出で行くに、崖の邊り目なれぬ赤蟹の横ざまに歩むもおかしく、とかくするうち次の驛に着くこの地方はおしなべて收獲の期早きよや彼處此處に米搗く音さへ聞ゆ、いまだ苅られざる稻穗の黃金色したるに吹く風に、重き頭うごかしつるも、豐年の徵見ゐてうれし、とある池に口すゝぎなどして行く。

路傍ゐ息ふ二老婦あり、近よるまゝに、何處よりか、今朝立ち玉へると問へば、敦賀よりと答ふ、老婦すら

かくも來つるに、吾れ等ははつとめて起きざりしを悔いぬ、いでや朝寢のとり返しせばやと、友はげまし老婦を後に歩みたり、佐柿、五市、瓦市、など同じ樣なる里打過ぎて、金山といふを通るに、いぶせき家の軒下に實に奇なるばかりの冷泉あり、のそめば清きこと鏡の如く、掬すれば冷かなること言はむ方なし、こゝに於てか互に携ふる、茶碗、麥粉を取出し掬ひては食ひ、渴を醫す、時に此のあたりの小女にや、水汲まむとて來りしが、余が變れる風を見て、唯呆然と立ちて動きもせず見つめたるは石佛の如くにておかし、側の小店に息へば、亭主の言ふ、この水は、近村稀なるもの、敦賀に至る間に、關といふ里あり、そこにあるものと合せて、二清泉と呼び旅客必ず掬せずと言ふ事なしと得意顏に語る、吾等は關を通りしかど夜の事とて知らず、たとひ知るとも尋ぬるすべなかりしならむ。

道は山麓に從ひたれば處々の山影に足を止めて息ひつ大藪といふ里に着きぬ、炎熱烈しき日の光は破帽を通して暑さ堪へがたく、さながらだに遂に疲勞と飢渴とに驅れて、今は足さへ重くなりしまゝに、とある宮を指して歩を移しぬ、こゝはいかなる神を祭れるにや、屋根破れ、板朽ちて蟻はほしいまゝに棲を造るめり、社の前にぬかづきて、あり合ふ岩根に腰下し參差枝交ふる古松老松をながめ、梢のあたり吹く風に肌押ひらけて涼む折から、何處ともなく數多の蚊集まりて、しきりに血を求む、長居する處ならずと空腹を抱へ足をひきつゝ立去りぬ。

右の方遙かに三方湖を見、左には連らなる山々を眺めつゝ行く、此の邊は風景佳なる所多かるめれど、行手を急く身に探るひまなし、漸く三方の驛に着きぬ、飢餓愈々迫りて忍ぶべからず、左りゟ折れて山に入る道あり、登れは道きはなる處に古く朽ちがちなる一華表あり、樹木茂りて晝なほ暗く、少し入りたる小高き所に一小社あり、涼風おもむろに青葉動かし來れば、涼しさいふべくもあらず、暑さは、いつしか身を去りぬ、

青苔地を蔽ひ恰も天鵞絨を敷きたらん樣なり、これに疲れし身を横ふゟ、又もや蚊軍は吶喊をなしてせまる勢幾百なるを知らずとはいへども最早や身を移す勢なく、枯木落葉取集め、火を燒き其の烟に蚊追はむとすれば後、横よりせまり後を拂へばまた前より寄せく、五月蠅きこと言ふゟ尽す能はず、遂ゟ追ひ退くるすべもつきければ、打すてゝ辨當取出し食ふに美味口に、こびたり、元氣漸く元に復しぬれば紀行など認めて又出立つ。

同し町を通りし時友は草鞋買はんとて、とある店に立寄る、思はざりき先に追越して今は數十町の後にあらむと思ひし彼の二老婦は同じ店に茶など飲み居らむとは、あまりの事ゟ打驚き、この樣は昔話しの兎と龜にも似たらむかしなど打興じつゝ、大に悟る處あり、右に折れ左に曲りする間に村里八つ程へし頃は日既に、我等を斜に射たりき、吾進みしは丹後街道なり、これより新堂越と呼ぶ嶮坂を越ゆる岐道あり、これを行けば志す驛に達するに數十町利あるよし聞きければ、日は暮れなむとするになほ二里にも近き難路をひかへたり、たとひ野宿するも何程の事かあるべきと勇を鼓してこの道をとる事に決したり。

右の肩にはライス及雜品をかけ左の肩には外套をかけたる事故身は輕からず、まして三日間瀉車腕車の便あるも敢てかへりみざりし吾々はこゝに足疲れ肩痛みてはしめの勇氣はいづこ、此嶮岨を上る勢も失せぬ、されどかくてあるべきにもあらねば、人の教へし道を辿りて、予は友に先んじて歩を運びぬ。

仰けば刀もて削りたらん如き大山は前面に横はり、俯すれば雜草道を蔽ひて地を蹈むに迷ふ、遙に樵夫の聲など聞きつゝ十數町を歩みけるゟ、溪水遠く深山に發し、岩に當りて玉とちり、碎ては又合水は奔馬臥牛の如き巖を廻り草を洗ひて走るいろ清く、畫に書くも及ばざらむ風情に、折から飢餓に迫る身の其まゝ通り過ぎ得べき、まして足疲れ肩はいたむに於てをや。

乃ち荷をおろし、苔むす岩に倚りて坐をかまへ草鞋のとけ紐しめなほし、やがて麥粉、茶碗取出し汲みてはゆるき、溶きては啜る事二碗、其の味の美なる、王公が山海の珍も之に如くべくも思はれず方に三碗に及ばんとせし時、忽然後ろに聲あり驚き顧れば一大漢忙然と彳みて、予等のさまを怪むもの丶如し、漸くありて男口を開きて予等の行手を問ふ、予も怪しみしかど問はるゝまゝに熊川に行くものなりと答へしか、男いふ予は此の近隣に木樵る者なり、今しも此の道を辿り行き玉ひし影を見て思へらく必す熊川に出て玉はむ人なるべしと、然れども此道は深山まのみ通すものにして、人家もなく遂には道きはまりて詮すべなかるべし、急ぎ道しるべせばやとて來りしなり、幸にこゝに居玉ひしことこそ喜はしけれ、いさ此方へと云ひければ、且は驚き且は悅び、或はこの山の神佛權化し玉ひて導かせ給ふならむと、あはてゝ荷物整へ、從ひ行けば二路に別れし所に至り、その一を指して是こそ君達の取り玉ふべき道なれ、今少し行き給はゞ、溪水山を廻り道に沿ひたる所あるべし、これに從ひ玉はゞ必す熊川まに達すべしと、いとねもごろまに敎へれらしかば、頓首その厚意を謝し、別れて進めば、路傍二店あり、入てマッチを求むるまあらず、主婦僅に三四本あるを取出し之持ち玉へといふ、謝して行く手を追ひ、少女草を負うて家路に急ぐ、愈々進めば愈々嶮まして見渡す限り山又山、溪又溪のみ、道細うして荆棘地を蔽ひ、處々出てゝ、泥の爲に歩行になやむこと甚し、日は松の梢に落ちて、溪水の聲ものさびし、丸木橋より瞰下せば巨岩怪石數を知らず、矻立する邊り白泡四散して雲霧の如く其の響轟々山谷を動かすが如く、膽消ゑ脚震ふ、漸く渡り終りて、柴荷ふ翁まに道尋ねなどして行く、頂を越へて十數町下れば田圃あり乃ち熊川に近き事を知り、漸く勇み立ち、杖を力と恃み、足曳き行けば膝のあたり力なく倒れんばかりなり。

麓まに至りし時は日既に沒して怪鳥塒を爭ひ、横手の深谷水聲高く、松杉の樹木枝を交へて暗黑たるなど、いと氣味惡し叢にすだく轡虫の聲相和して予等の心弱きを嘲るが如し、林かくれに燈火の見ゑしより、二人は雀躍してわれ知らず互に先きを爭ひて足を運ひぬ、この里こそ新堂なれ、里つゞきにて熊川に着せし時は人の面すら知られざりき、人戸四百余りあり町並とゝのひて山奥には珍らしき驛なり、いざこれより宿求めむと彼方此方を探る、予は之より艱難辛苦を覺悟のことなれば、堂々たる旅館に投するを欲せず、紙屑買、又は飴屋などゝ伍し、一つは彼れ等下等社界の人情など察せむも興なりと思ひ、燈火暗き宿を問ひたるに、客充てりとて斷られしかば、如何とすべきを知らず、重き足曳きつゝ元來りし路を歩みつゝ、とある家にて尋ねしに、此あたりに、さる宿あらずと答ふ、さらば今夜は愈々岩を枕まに草をしとねまに一夜明すべきかと思へばさすがに心細かりき。

家の主人と思しき男四疊半にも足らぬ土間まに素肌にて、酒肴などならべ隣の人にも進めなどしてありしが、予等に一休すべしと頻にすゝむる言の何となく情のあり氣なりければ進めにまかせて、家へ入りぬ。

彼の男言ふ吾等は社界に卑めらるゝ一車夫の身なり、故に遠く山野を馳せ廻り艱難辛苦に逢たる事かすしらず、されど宿なき程憂き事はあらじ、人のかゝる事に逢ふを見る毎まわれも其の塲まある心ちせらる、君まに吾が家はかく狹く穢しとも野宿にはまさるべし、いとひ玉はずば、一泊なし玉はれまとすゝむ、吾等は地獄に佛に逢たらむ心ちして、なさけある言葉にまかせ、一夜の宿借ることになしぬ、疲を休むる湯だになし、心ゆるみしにや、立たむとすれど足心にまかせず、這ふが如くにして足洗ひ、三方にて夕飯の料に殘せしを取出し食ふ、明日の料とてライス出して賴みけるがそを心よく、受けし妻もいと情多き人なりと知られたり、亭主いふ、家狹少にして赤貧洗ふ如くなれば、盜賊の憂なく、冬の如きに至りては戸口まに火を燒き、戸開けて寢ぬる習なるが、東白らむ頃起き出て見れば、多くの旅人この土間に、横はりて夢を結びたること數度な

りなど語る、世には堂々たる一家を構へながら一椀の飯を乞へども顧みざる輩多し此の車夫などに比してい
かゞ耻かしからずやはと思ふ。
僅か四疊にも足らぬ一室に主客共に横はればいつしか予は夢路を辿りぬ、夜半不圖目覺むれば、夕立かした
りけん、軒ばの雫音繁く後ろの川音烈しく聞ゆぬ、あすの旅路やいかに。

◎春の日の遊びを記す

第四年級　那須開神

春のあした、ほのぼのとあけゆく空に八重がすみ、たなびきわたりて庭のもの、梅は今を盛りと咲みちて、
春告鳥も囀れり、其の聲さながら琴を彈くがごとくゝなむ「あら玉の、年たちかへるあしたより、またるゝも
のは、うぐひすのこゑ」と、昔の人もかくこそよまれき、あはれ梅も咲きぬ鶯も來鳴きぬ、學びの窓に籠り
ゐて、この景色にそむかんことの忍びがたさに、まなびの友をかたらひて、某野にと、ものしぬ、この日は
天氣うらゝかに霞たなびきわたれり、柳に迎へられ花におくられて、野外のけしきいともめでたし、いづれ
を訪はんと定めしゑあらねば足に任せて行くほどに、友のいひけるよう、某野の梅の花、今やさかりと、き
けり、たずねばやと促しぬ、依りて、踵を廻らしてすゝみぬ、行き行くほどに、ふと右を見れば、ふるめき
たる、社のありけり、注連縄飾りたる表鳥居をうち越ゆて、社に詣でぬ、心の内に泰平の、祈りをこめて、
またも歩みをすゝめぬ、堤をたどり流るゝ水に沿ひてゆくほどに、友のいひける某野は、はやわが前に見ゆ
けり、見わたせば、梅は盛りとさきみだれ、かすみのおくはわかねども見ゆるかぎりは珠をもて、綴れるが
ごとく、時ならぬ雪か、雲かと訝からるゝばかりにて小枝を傳ふ鶯の、さへづる聲さへきこゆぬ、むかし黄
帝の吹きすさびし十二律も、なじかは之にまさらめやと思はれけり、酒酌む人の其すがた、花見る人のその
風情、つたなき筆にはなか〳〵につくしがたくてなむ、あまりうれしくたのしくて榮辱共に忘れけり、しば
しあちこちとさまよひけるがいつしか夕ぐれの鐘の音ひゞきてたそがれどきに、なりければ、おのが家路へ
歩をめぐらしぬ

◎昨夜の夢

第四年級　河村喜一郎

月にあこがれ、雪を愛でにし秋冬は、いつしかすぎて、錦織りなすさほひめの袂、ゆたかなる春とはなりぬ。
山べの景色、野路の眺め、云はん方なくゆかんなるよは、たかきも賤きも、一つ心に浮き立つめり、頃は卯月
の初つかたなりき、一夜文机に向ひ、例の如く物しける程に、いつになく心うく、筆澁り、頭さへ重き心地
しければ、目さまさんとて、澁茶の黄金色したるを、幾椀となくのみ續けゝれど、目さゆねば、やがて臥床
に入りぬ。此時柱時計を見あぐれば、九時なりけり。障子には春の月の、松影をうつせるが、やがて其のゆ
かしき松の影は、忽きゆ失せて、ともしびの光、うすくかすかにてり渡りぬ。既にして又もやさつと、同じ
き松影の、あざやかに現はれぬ。さては行きかふ浮雲のしわざにやあらんと思はれぬ。
夢うつゝ褥に伏しぬれば春の夜の月もふけぬ。燒芋屋の聲とおぼしくいと高くきこゆ、大工のなにやらんか
た〳〵と、音させて働くが聞ゆ。讀經の聲の尊げに、木魚の響、或はゆるやかに、あるはきびしくひゞきて、
ゆ眠るべくもあらざりしが、暫の程に打ちやみぬ。やゝありて、親しき友垣の三人うちつれて、鴉の湖邊に
あそばなんと、そゝのかしければ、それよとたゞにうべなひて、共に〳〵、出立つ。歌など口ずさみて漸く
至りつくに、湖面はしろがねもてたゝめるよろひの如く、いとうるはし。予等四人のものは、白砂の清らな
る所にまとゐし、琵琶のけしきを翫びて、あるは學びの庭に於けるとぞも、あるは昨秋の脩學旅行、あるは

こたびの學年試驗、さては磯のはまべにつりたれたるなど、たがひにかたらひ居ける程に、いつか時をうつしぬれば、皆々立ちあがり、芹堤をさかのぼりつゝ家路につくよ、さきに野山をくまなく照らせし春の夜の月も、雲のいづくにやどりけん、あたりはぬばたまのやみとなりぬ。一人去り、二人去り、三人去りて、はや我が家近くにきたるときは、己れ一人になりたれば、恐ろしとにはあらねど、心地よからぬば、いそぎてわか家に向へるにあたり、さくらやみなれば、さぐりさぐりて、やがて予が門前よ、至らんとするとき、ゆくりなくかたきものよあたりぬ。あはやと驚きて、目をさませば、あたりいときら〳〵しく、身は床よ横はれり。さては夢なりしかとこゝろづきぬ。

頭もたげて見廻せば、窓の隙より、豊榮昇るあさひこのかげ、いとうらゝかにさし込み、梢よは小鳥なんどの、喜ばしげにさへづりて、長閑なる春の朝なりけり。母君は朝食の用意できたればとて、弟と、われとを起し給ひぬ。今日は何して遊ばなんと、弟はつぶやきながら、なほ目さめかねたるまなこをこすりぬ

◎月夜の感慨

第四年級　河村喜一郎

夜更けぬれば、人々もうまいやしつらん。鼾の音の高く響きぬ。やをらよみさしたる書を閉ぢて、外に出づれば、大空清くすめる月は、門田の稲葉、あるは千草よ結ぶ露を照して、さながら水晶の珠を、散らしたゝんが如く、いとうるはし、晝見ればもの悲しき秋の氣色も、夜の程ぞかへりて興ありける。庭の櫻の葉は、むなしく秋風にゆられて、見所なく、柳またおはれなり。

あな秋風の無情なることよ。草木をからし、野山をあらし、空しく寂寥の觀を留む。屋前に流るゝ小川は音すみて、みな底よ沈める月あり。又仰ぎ見れば、眞澄の鏡を懸けたるが如く、大空に光みてり。あはれ月よ汝はいかよ樂しきか。幾千年もかはることなく、世界に照り輝きて、照さぬ隈なく、諸人に仰ぎ望まれて、めでらるゝことのうらやましさよ。人喜べば又喜び、人悲めば又悲む。いつ終ると云ふことなく、悠々として、天地の間よ徘徊す。あゝ汝ほど氣樂なるものはあらじな。月よ汝は人生を、はかなきものと思ふらん。人々擧りて露の命をつながんとて、日日職業に忙はしく、東奔、西走するありさまを見ては、いかにおかしと笑ふらんかし。

されど月よ。此の世界ほど面白きものは又とあらじ。學者たらんとすれば、學者となることを得べし。英雄とならんと欲すれば、英雄となることを得べくして、世界の人より仰がれて、名を萬世に遺すことをもうるなり。月よ汝は恰も死灰の如し。僅に日光を受けてかゞやくのみ。一度むらくもに覆はるれば、忽光を失ひ數万年を經ても、さしたる効果を人生に及ぼさず、月よ月よ、汝は空しく佳人に暗涙を灑がしめ、閑人の賞觀を受くるに留るのみ。あゝ今よりは汝をうらやましなる。中々よ此の世の中こそ面白けれ。いでや大學者とならん、大豪傑とならん。人生名譽の光は月よりも強し。ほまれを世界にかゞやかして、名を萬世までも垂れなんなど、獨言せしほどよ、いと夜更けて肌寒し。

あゝ徒らに月に對して妄念を勞せしことの愚さよ。いまはいねなん、と思ひて首を回らせば、月は猶ひやゝかに笑へるが如くなりき。

◎草　枕

第四年級　野村義雄

十一月六日。夜もまたくあけはなれぬ、とく起き出でて見れば、そらよく晴れて、あたりのけしきいはんやうなし、この木の本は、わが里をはなるる十里あまりの驛なりいまこゝを出でなむとするよあたり、坐ろに故

郷の空ながめられぬ、

けふもまたねこし山越し川を越し故郷とほく旅だちぬるかな。

口すさみつゝ大岩山にのぼりぬ、秋風すごく松にひゞきてあたゝの色も、いとあはれなり

きゝねてし大岩山にきて見ればあはれもふかく松風ぞ吹く。

しばしやすらひて賤が岳にのぼりぬ、谷川に紅葉流れて、いとあから見ねたれば

秋風に散りて流るゝもみち葉はあはれむかしの血汐なるらむ。

をちこちにぞゝろありきして、余吾湖よ石を投げぬ、

矢叫のこゑのきこゆる心地せり小石を投げし水のひゞきに。

のち山をおりて、つゞら〳〵をめぐりしに、後にて聞けばかねて聞き及びし沙婆廻りなりき、竹生嶋をひだりにながめて大浦につきぬ。

明くれば八日。耳なれぬ波の音に、ゆめをやぶられて朝まだき、今津を出でたつ、のどかなる秋の日より、四方八方のけしき、いはむ方なし、やうやうにして饗庭てふ大野につきぬ、

又たぞり〳〵て小川村にいたりぬ、今や村に入らむとせしに折しも、草鞋のひも打ちされて、行くべう覺ねざりければ、列よりはなれ、とある野茶屋に投じぬ、新しきものを古きにかへ、立ち出でんとする時、あまりつれ〴〵なるまゝに、かく日記の中にものしぬ、

からびたる柿並べありやすみ茶屋。

この里は近江のひじり、藤樹先生のおはせし地なりけり、こゝにひるげして、苔むすみ墓に詣でぬ、

このみ墓苔の雫を身にあみて穢れたる世をわれさまさばや

この村はまた硯の産地なりとか聞けり、茅屋〳〵にひさがれぬ、一つ二つをかひとゝのへて、勝野路にさしかゝりぬ。（完）

◎城山の雪戰

第三年級　清水省三

時は如月十六日、夜來の雪は膽吹やまの山嵐に送られつもりて、地を覆ふこと尺許、寒風耳を劈かんばかり城濠の碧水亦堅氷に鎖されぬ、午後二時、突如命あり、積雪皚々奇貨置くべし、これより城山に雪戰を試むべきなりと、時や時、我校健兒三百は欣然として色動き、軍歌の聲勇ましく、白雪を踏みしだきて校門をうちいでぬ。

全生徒は攻擊隊、防禦隊の二に分たれ、更に二分せられて大手口と尾末町口とに屯せり、而して樂々口は防禦隊すでに橋梁を破壞して、敵兵を扼せり、池田先生は防禦隊をひきゐぬ、玉木先生は攻擊隊よ將たり、かくの如くにして愉快なる大激戰は、琵琶湖邊金龜城下に開始せられんとす。

三時頃とおぼしきよ、戰はまづ大手口に於て始まりぬ、驚破やでざんなれと敵も味方も入亂れて戰ひぬ、あるは眞向に敵彈をうけて倒れ、あるは眞一文字に飛丸を潛りて進むなんど、實にものすごき有樣なりき、かゝる程に防禦隊は、橋梁の廣くして敵の渡るに便なりしと、攻擊をうくるに先だち準備の全からざりしとによりて、頗る不利の位置にあり、折しもあれ敵の一隊、何處よりか忍び入けん、傍への茂みの中より不意に襲ひ來りて、いたく側面を攻擊せしかば、防禦隊は足並亂れてしどろもどろとなり、間もなくこの守をすてて、一目散に頂上へと逃走したるこそ是非なけれ。

大手口より稍後れて始まりたる尾末町口の戰況はそも如何に、橋の狹長なると雪のなかりしとは、攻擊隊に

大なる苦楚を與へぬ、のみならず、崖上なる一隊は高地に據りて彈丸を打放つこと雨霰の如く、山なす白彈を容赦なく飛ばして攻擊隊を怯ましめしかば、その苦戰一方ならず、されど群るつはものは近きより遠きより攻め寄せて、互におめきつ叫びつ必死となりて戰ふこと數十分、遂て攻擊隊は時分をはかりて肉薄急進したりけり、疲れ果てたる防禦隊はこは叶はしとや思ひけん、右往左往に走せ散りぬ、それと見るより攻擊隊は、あれ見よ敵ははや逃ぐるぞ、いざ追ひつめて打取れやと、一齊に吶喊の聲をはりあげつゝ無二無三に追駈けたり、其響は森々たる金龜山の木立に返響して、もの凄きなんどいふばかりなし。

山腹に於て合したる兩防禦隊は、廊下橋と頂上との二に分れて忙はしく守備の配置に就きぬ、程もなく追ひ來りし敵は潮のごとく、勢に乘じて攻め來り、雨注する彈丸をものともせず、見る〳〵廊下橋の一隊を打破り、今一息と頂上さして雪を蹴りつゝ駈せ上りぬ、されどもこの頂上の一隊こそ防禦軍が最後の死力なれ、加之數十丈の絶壁を利して數千の白彈を積み、手ぐすねひいて待ち設けたることなれば、攻擊隊如何に強くとも、容易には破り難くぞ見ゆける。

かゝることゝは何條知るべき、只一揉に揉み潰さんものをと攻擊隊は、天地も震はむ聲諸共、津浪のごとく崖下に迫りぬ、時こそよけれと防禦の面々、こゝを先途と敵を沮み、一生懸命に防ぎければ、流石逸りし攻擊の者共も、あつとばかりに逡巡ふ所を、攻擊隊長玉木先生は最後の勇を衆に示して、面もふらず眞一文字に進まれしかば、これに一きは勵まされ、降り來る敵彈をくゞり拔けはやひた〳〵と攻めのぼりぬ、こゝに防禦攻擊の兩軍、全力を盡して接戰數合、敵も味方も必死の期と見ゆける折しも、忽ち吹き出す休戰喇叭は遂に雪戰の休止を報じぬ、全身汗と雪とに濕ほされたる快男兒はしたゝる松の雫を浴び乍ら、再び隊伍を整へ歩武肅々として、暮鴉と共に校門を入りにき、顧みれば金龜山上老松古杉猶鬱々として、綠衣白冠巍然として吾人を睥睨し、耳を峙つれば梟鳥一聲肝膽寒し。

◎筆のすさび

第三年級　白井敬次郎

夏とし云へば、暑く苦しきものとのみ人々は思ふめれど、また、他に得がたき樂もなきにあらず。

翠滴らん計り若葉茂れる頃はやくふしとを出でゝ、そゞろありきすれば、日はいまだ出でず、清らけき空氣身にしみて心地よし。草には清き露をやどし、あさかほの垣根に二つ三つ咲ける、げに眼のさむる心地ぞする、夕ぐれに、小田の邊りに立ち出て見れば、涼風袂を飜し叢に螢の三つ四つ飛び交ふさま、或は高く、或は低く、遠く、近く、ときど〳〵水に流るゝ影涼しけなり。七月にもなれば、暑さ避けん爲め、緣蔭の許にたちよるに、清風翠竹を搖かして、いさぎよし、あるはまひるの頃より、いと蒸し暑くて、黑雲のはるかの高根に懸りたるは、彼の夏雲奇峰多し、とか云ひけんに似ていとをかし。やがてその黑雲は、四方に廣ごり行きて、恰も墨を流したらんか如く、雨蛙の雨を呼ふ聲喧しく、鳴る神のおとろ〳〵しく、暑さはいや增して堪へかたし。折りしも、豆の如くなる大粒の雨、梧の青葉に落ち、これに續きて、恰も礫をうつが如く降り來り、雷鳴は、さながら巨礮を連發するが如し。雨は、時の間に過ぎ行きて、後には洗ひ出でたるが如き夏の月は清光を放ちて、恰も浴を出でし美人の如く、青空に懸りて、風鈴の音なぞきこゆ。又晩夏には、汚泥を出でゝ、濁りに染まぬ、蓮花の咲き出でゝ、花の香送る夕風も、いとこゝちよし、又湖邊に漫歩すれば、夕陽橫雲を彩りて、水面に映じたる、いと美し。又小舟を浮べて、波にまかするも、秋の舟遊よりは、一入面白し。あはれ、かくも樂しき夏の日を、誰れか苦しとのみは云ふならん。